

虫さん、いたね！

すぎの子幼稚園・おおぞら保育園（群馬県桐生市） [0～2歳児]

〔背景〕

『感性の教育は0歳から』…昆虫とのかかわりとして、どのような方法であれば、0歳からの取り組みができるのかを考えてきた。見るもの全てに興味を示し、言葉を発しない1歳児とのかかわりにはまず、言葉がけが重要である。「これは〇〇よ！」「虫さんいたね！」などと伝えることで、早くから物とのつながりができると考えられる。この時期に繰り返す直接体験を通して、保育する側がどれだけ子どものしぐさや態度を読み取れるかによって、その後の3歳以降の“科学する心を育む”ことに大きな影響を与えるのではないかと考えた。昨年経験した昆虫とのかかわりが、今年発展し、充実したかかわりにつながっていった。

〔0・1歳児のかかわり〕 H18.7月

自然界に生息する昆虫を直接追いかけられない分、大きなカブトムシの飼育箱を用意して、身近に見られるように設置した。

毎日のように、飼育箱にはりついて興味を寄せる子、まだまだ興味をもてない子など、個人差はあるが昆虫たちに関心もてた。

「あつ！
いた！いた！」



〔2歳児のかかわり〕 H19.7月

昆虫に触れる楽しさを味わえるようになってきた子どもたちに、カブトムシと触れ合うことのできる環境を作った。

そして捕まえたカブトムシを遊んでいる所へ放した。

服にくっ付けて喜んだり、怖がったりするなどの一喜一憂する子どもの姿が見られた。

「カブトムシだ！
ここにもいる！」



「持ちたい！
どこ持つの？」

「きゃ〜!!
怖い！」

〔2歳だった子どもたちが3歳になった今〕 H20.7月

子どもたちとクヌギの樹液に集まる昆虫たちの本来の姿を観られる環境作りとして、昆虫ハウスを作った。

「わー、カブトムシがいっぱいる！」

「見て見て！カブトムシのバッチ！」

「木にいっぱいいる！」

「カブトムシがけんかしてる！」

「がんばれ！！」

「カナブン、チョウチョもいた！」

カブトムシ
持てたよ！



考察

0歳児から2歳児の時期に、昆虫とのかかわりが継続して安全に行える環境を設定することで、ほとんどの2歳児はカブトムシや幼虫に触れるようになった。0・1歳児は「あつ！あそこにいるよ！」といった言葉がけで、自分の目で探そうとし、「あつ、いた！」と自ら昆虫たちを探そうようになっていった。昨年からのかかわりの中で、3歳になった子どもたちは「昆虫ハウス」の中の昆虫たちに、興味、関心の高まりが芽生え、自ら世話をする姿が見られるようになった。

ポイント

この事例から、0歳から2歳までの同じ月の場面を振り返ることで、虫とのかかわりの変容や発達が見えてくることがわかります。子どものしぐさや表情、発せられる声から、興味や思いを読み取り、寄り添う保育者の存在が、子どもの生活や環境、活動や興味を広げ、豊かにしています。乳児なりに興味の対象をよく観て感じ取っていることや、自分なりに感じたことや気持ちなどを表していることから「科学する心」を捉えることができます。